

幼稚園における絵本の読み聞かせの選書の分析

— 3年間の記録から —

藤岡 久美子¹⁾ 伊藤 恵里奈²⁾

保育の場では日常的に絵本の読み聞かせが行われているが、保育者がどのような絵本を選んでいるかについては体系的な研究は見当たらない。本研究では、ほぼ毎日読み聞かせを行っている幼稚園の3年間の保育記録（3歳・4歳・5歳児クラス）から、読み聞かせを行った絵本のタイトルを収集し分析を行った。その結果、対象幼稚園では同じ絵本を読み聞かせることが少なく、様々な絵本を紹介していたことが示された。学年・学期毎の特徴として、3歳の1学期（入園～夏休み前）は、読み聞かせの場の定着を意識した選書を行っていることと、園生活のガイダンスとしての絵本の読み聞かせも行っていることが示唆された。季節や行事に関連する絵本は、どの学年でも3学期に高かった。5歳の後半は、昔話のほか、落語を扱った絵本など言葉の文化に触れるような読み聞かせも行われていた。これらの結果を、教育課程・指導計画に位置づける絵本活用プラン策定の観点から考察した。

キーワード：幼稚園 絵本 読み聞かせ 選書

問題と目的

保育における絵本の活用の意義

保育において絵本の活用は必要不可欠である。幼稚園教育要領（文部科学省, 2008）では、領域「言葉」において絵本への言及があり³⁾、絵本と親しむことで幼児が言葉に対する感覚を養い、想像をする楽しさを味わえるようにすることが、保育のねらいや内容として挙げられている。幼稚園教育要領解説（文部科学省, 2008）には、園ならではの絵本との触れ合いについて、以下のように詳述されている。

家庭と異なる点として、園では、絵本や物語を「教師や友達と一緒に聞いたり、見たりするときには、皆で同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感などが醸し出される」ことや、絵本で触れる内容についても、家庭では「自分の興味のあることを中心に見たり、読んだりすることになるが、幼稚園では教師や友達の興味や関心にも応じていくので幅の広いものとなり、（略）新たな世界に興味や関心を広げていく」ことが挙げられている（内容9の解説）。さらに、「幼児は、教師に読んでもらった絵本などを好み、もう一度見たいと思い、一人で絵本を開いて、読んでもらったときのイメージを思い出したり、新たにイメージを広げたりする」ため、「保育室における幼児の動線などを考えて絵本のコーナーを作っていくようにすることが求められる。」と、絵本環境について言及している（内容の取扱(3)の解説）。

“皆との一体感”と“興味の広がり”が、保育の場ならではの絵本の活用の意義であり、それを実現する

¹⁾ 山形大学大学院教育実践研究科

²⁾ 山形大学附属幼稚園

³⁾ ねらい(3)「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」、内容(9)「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」、内容の取扱(3)「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」

ために、保育者は幅広い内容の絵本を読み聞かせ、それらの絵本を子どもが自由に手に取れる環境作りが求められている。

保育における絵本の活用の実態

では、幼児は園でどの程度絵本と親しんでいるのだろうか。すなわち、園での絵本環境はどのようなものなのだろうか。

平成13年(2001年)の「子どもの読書活動の推進に関する法律」制定後に、自治体が「読書活動推進計画」策定のために、学校や地域、家庭などにおける子どもの読書環境全般に関する様々な調査を行ってきた。学校図書館の蔵書数や利用状況などがそのような調査に共通の項目である。しかし、幼稚園図書館は学校図書館法には含まれておらず、図書室設置は義務ではないこともあり、幼稚園や保育所の蔵書数まで調査したものはあまり見当たらない⁴⁾。

一方で、絵本の読み聞かせについては、多くの調査で、保育所・幼稚園で日常的に(週に4日か5日)、読み聞かせが行われていることが示唆される。保育者による読み聞かせの実践記録や(例えば、中村, 1997)、保育者向けの読み聞かせリストなど(例えば、高山・徳永, 2008; 石井・甲斐, 2014)、数多くの書籍が出版されていることから、保育の場で読み聞かせは定着しており、保育者は毎日のように何らかの絵本を子ども達に読み聞かせているといえよう。

読み聞かせ絵本の選書

それでは、保育者はどのように絵本を選んでいるのだろうか。上述のように読み聞かせの実践記録や絵本紹介の書籍は多数あるが、実際に保育者がどのように、あるいはどのような絵本を選んでいるかに関する研究は少ない。

横山・水野(2008)は、5歳児担任3名を対象に、1学期と2学期の1回ずつ読み聞かせ場面の観察と読み聞かせに関するインタビューを行った。その結果、保育者は「日頃の子どもの姿や他の保育活動、季節とかかわらせながら、子どもの生活体験に寄り添った読み聞かせ」をすることを最重視していた。また、大橋・中

平・松本(2005)は、小規模サンプルではあるが保育者を対象としたアンケート結果から、保育者は行事や季節との関連で絵本選びをしている傾向を示唆している。

以上、保育の場での絵本の読み聞かせは、季節や行事を含む子どもの生活との関連でなされることが多いことがわかる。しかし、このような傾向は、年齢・時期によって異なるかどうか、不明である。保育の実践において、絵本の選書を詳細に分析した研究はない。そこで、本研究では幼稚園の3年間の保育記録を分析し、絵本の選書傾向を明らかにする。

対象となる幼稚園では、毎日の読み聞かせを基本としており、週案を作成する際に読み聞かせする絵本を選定している。しかし、教育課程や年間指導計画に特段に読み聞かせに関する記述はなく、教育課程との関連や長期的な見通しの中での絵本の選定は行われていない。読み聞かせ絵本の選定は、発達に沿って、あるいは幼児の遊びの展開に応じて、保育者が判断している。しかし、その判断は、保育者個人の経験によるところが大きく、実践知が共有されているとは言い難い。

読み聞かせが幼児教育・保育に欠かせない活動であるなら、入園当初から卒園までの園生活、卒園後の小学校教育への接続までを見通して、教育課程や年間指導計画に位置づけられるべきであろう。そうでなければ、日課としての読み聞かせを生活との関連でのみ展開してしまい、横山・水野(2008)が言う「『今、ここ』の生活とのつながりの中に保育を押し込める」ことになり、日常から離れて空想世界にどっぷり浸ったり、意味の世界にとらわれずに感性に直接訴えるような絵本で豊かなイメージを育んだりといった実践が、なされないままになってしまう。したがって、本研究の2つめの目的として、読み聞かせの分析結果に基づいて、教育課程や年間指導計画に位置づけられる絵本活用プランを策定のための示唆を得ることを目的とする。

方法

対象幼稚園

概況

大学附属幼稚園で、3歳児は2クラス(各クラス毎年15~17名在籍)、4歳児及び5歳児各1クラス(30~34名)の計4クラスの構成であった。自由保育を中心とする保育形態をとっており、基本的に学級での朝の集まりはなく、全員が登園するまでは室内で自由に過ごし、その後、天候に問題がなければ、9時半前後

⁴⁾ インターネット上で閲覧可能であったものに沖縄県那覇市、長野県軽井沢町、埼玉県戸田市の調査資料がある。全体として、半数程度の保育所・幼稚園で、蔵書数は500~1000冊であった。

には多くが外に出て遊ぶ。室内に残ることも自由である。11 時頃には徐々に片付けを始めて、昼食前にクラスでの活動として、音楽に合わせて身体を動かしたり、ゲームをしたりする。昼食後もクラスでの活動を行う。降園前に、絵本の読み聞かせを行っていた。

幼児用書籍の蔵書数

図書室で管理している幼児用書籍は、子ども向けの図鑑類を含み 2888 冊及び紙芝居 321 個であった(分析対象年度終了時点)。PTA の協力により蔵書リストが作成されている。これとは別に、クラスごとに月刊誌バックナンバー(福音館書店の『こどものとも』『かがくのとも』、フレーベル館の『キンダーおはなしえほん』、ひかりのくにの『こどもとしぜん』など)が所蔵されている。各クラス 240 冊程度であり(1 か月分 20 冊×12 か月)、年少であるほど「物語絵本(創作童話や昔話などの絵本)」のシリーズが多く、年長になると「科学絵本(動植物、自然現象、身近な環境などへの興味を深めることをねらった絵本)」の割合が高かった。以上、すべてを合わせると、4000 冊強が園全体の蔵書数であった。

絵本選択のプロセス

①学期毎の保育室貸し出し絵本の選択:4月、8月、1月の各学期開始前に、図書室より、3歳児各クラス30冊、4歳・5歳児クラスは各50冊を借り出す。借りた本は、各保育室の絵本コーナーに配架され、子どもが自由に手に取ることが出来る。学期終了時に、図書室に返却し、新学期に向けて選定し直す。すなわち、年に2回入れ替えていた。

②月刊誌の選択と月刊誌バックナンバーからの配架本の選択:年度ごとに各クラスの担任が月刊誌の種類を選択し、購読契約していた。新刊および、前年度以前のバックナンバーは、各保育室内の収納庫で管理し、該当月の新刊とバックナンバー数点を、絵本棚に配架していた。

③週案作成時の読み聞かせ絵本の選択:週案作成時に、おもに、上記①と②から絵本を選択した。特に必要とする絵本(紙芝居を含む)がそこにはない場合には、図書室や他の保育室から借り出したり、また、幼稚園で所蔵していない本を公立の図書館から借りたり、保育者の私物を使用することもあった。また、担当学年の過年度の週録は担任の手元にあるので、参照可能となっていた。3歳児は2クラスあるため、入園当初や行事前など、担任が相談して同じ絵本を選択することが

あった。週案はあっても、当日の子どもの様子に応じて、予定とは異なる絵本を読み聞かせることもあった。④書籍の購入:年間を通じて可能であるが、例年、夏休み中に、2学期の運動会やお遊戯会のテーマを構想し、テーマに関連する絵本の新規購入を行っている。

分析対象資料:3年間の読み聞かせリスト

X年度～X+2年度の全クラス分の週録から、読み聞かせ用に選択された絵本のタイトル等のデータファイルを作成した。年、月、週、クラス、担任、タイトル、のほか、後述の絵本のコーディングをデータとした。また、週録にあるその他の情報(遊び、出来事、園内行事など)を、考察の際に補足的に用いた。

各年度の担任は、表1に示した通りである。担任の保育経験については、CとGは20年以上であった。A,B,D,E,Fは、小学校教諭としての経験は10年以上であるが、幼稚園での保育経験は1～5年であった。このうちの1名が第二著者であった。

表1 年度ごとの各クラスの担任

	X年度	X+1年度	X+2年度
3歳児2クラス	A・B	C・B	C・B
4歳児	D	E	F
5歳児	G	D	E

絵本のコーディング

読み聞かせリストに上がった全タイトルについて、以下の点に関するコーディングを行った。

①紙芝居か、②シリーズものか、③年中行事を扱っているか、④季節に関連しているか、⑤園生活に関連する内容を扱っているか、⑥繰り返し構造であるか、⑦昔話(日本の昔話と世界の民話や童話)か、⑧オノマトペなどリズムカルな言葉が特徴的に用いられているか、⑨言葉遊びやしりとりなど言葉への気づきを促す要素があるか、⑩ことわざや落語など言葉の文化に触れる内容か。これらのカテゴリーについてそれぞれコーディングした。

③の年中行事は、七夕や正月、節分など暦上の特定の日に関するものと、夏祭りや花見など特定期間のイベントを含む。⑤の園生活に関連する内容としては、幼稚園そのもの、園の行事(運動会、遠足、誕生日会、避難訓練)に関連するもの、及び、どろ遊び、雪遊び、おにごっこ、お絵かき、プールなど、園で行われる遊

び⁵⁾を扱うものを含む。

⑥の繰り返し構造は、『おおきなかぶ』で、かぶが抜けずに、[手伝いを呼んでくる→引き抜こうとする→抜けない→手伝いを呼んでくる→] ことの繰り返しや、『ぞうくんのさんぽ』で、散歩中に[仲間と出会う→背中に乗せる→また仲間と出会う→] ことの繰り返しだが、物語のほとんどを占めるような構造をさす。繰り返しがあっても、それが物語の一部分のみの場合は該当しない(例えば『ももたろう』)。

⑧～⑩は言葉に関するコーディングである。⑧のオノマトペは、繰り返しオノマトペが用いられるような絵本で(『おおきなかぶ』の「うんとこしょ どっこいしょ」)、古市(2014)を参考にコーディングした。また、リズムカルな言葉(『ねごさかな』シリーズでの「ふんふ ふんふん、にゃん にゃ にゃ にゃーん」)のような歌うような言葉も合わせてコーディングした。⑨は、音韻意識を喚起するような言葉遊びや(例えばガマンがマンガにへんしんする『へんしんトイレ』)しりとりが出てくる絵本が対象となった。⑧～⑩を合わせて、言葉の楽しさや美しさへの気づきを促す、“言葉の感覚を育む”絵本として集計した。

コーディングは、著者2名による協議により、絵本紹介サイト(絵本ナビ <http://www.ehonnavi.net/> など)の情報も参考に行った。

結果

読み聞かせ実施回数

3年間3学年(4クラス)の述べ読み聞かせ回数は1615回であり、このうち実習生や保育サポーターによる読み聞かせ分を除き、担任によるもの1495回を分析対象とした。表2に学年及び学期ごとの読み聞かせ実施回数を示した。5歳児の3学期は、卒園式の練習の関係で、降園前の読み聞かせが設定されないことが多かったため、他の時期よりも回数が少なかった。

表2 3年間の読み聞かせ機会の学年毎・学期毎の内訳

	1学期 (4～7月)	2学期 (8～12月)	3学期 (1～3月)
3歳(2クラス)	259	303	204
4歳	154	142	102
5歳	147	99	85

⁵⁾ 絵本の内容が遊びを扱っているものであるか否かに限定したコーディングである。子どもの遊びのテーマに合わせて選書したかどうか(たとえば、電車ごっこを楽しむ子どもの実態をふまえて電車が出てくる絵本を読み聞かせる)という観点でのコーディングについては、稿を改めて検討したい。

1冊の本が3年間にどれくらい読み聞かせされていたか

資料から、797タイトルが得られた。シリーズ名やジャンル名のみ記載で書名が書かれていないものが22個あり、それらを除いた775タイトルについて、読まれた回数の分布を図1に示した。

図1に示されるように、6割の本は3年間全学年を通じて、1回しか読まれていなかった。2回読まれているものは2割程度であった。この中には、3歳児2クラスで、意図的に同じ本を読んだケースも含まれる。

表3には、6回以上読まれた絵本タイトルを示した。3歳児クラスを対象とするものが多かった。季節に関連する絵本(梅雨『あめふり』、夏『ぐりとぐらのかいすいよく』)と虫の絵本(『ありこちゃんのおてつだい』『てんとうむしのてんてんちゃん』)は毎年のように2クラスで読まれていた。また、お遊戯会のテーマに関連して、複数回読まれる絵本もあった(『てぶくろ』『どうぞのいす』)。

3歳に限らず、行事関連(園外保育『14ひきのびくにつく』、もちつき『ばばあちゃんのおもちつき』、七夕『たなばた』、節分の鬼『こぶとりじいさん』『ももたろう』)のいくつかの絵本は、定番として多く読まれていた。

昔話で多く読まれているのが、3歳での『おおきなかぶ』『3びきのくま』、3,4歳での『3びきのこぶた』、全学年で読まれる『かもとりごんべえ』であった。

また、5回読まれている絵本は21タイトルあり、そのほとんどが3歳だけで読まれているものであった。

10回以上読まれていたのは、児童書(短編集(『いやいやえん』)、長編『ロボットカミイ』)を少しずつ連続して読んでいるケースであった。このように分割して読んでいるケースとして、ほかにも『エルマーの冒険』が5回に分けて読まれていたなど、5歳児で複数示された。

同一対象児への繰り返し読みはされているか

775タイトル中79タイトルの絵本が、繰り返し読みされていた(主なタイトルは資料参照)。以下、①同じ年に繰り返し読みされたケースと、②学年をまたいで繰り返し読みされたケースについての集計結果を述べる。

① 同じ年の繰り返し読み

同じ年に同じクラスで繰り返し読みをされた絵本のタイトル数は45、述べ49ケースであり、その内訳を

表4に示した。31 ケースが3歳児（3年×2クラスでの総計）での繰り返し読みであった。クラスの年平均では、3歳が5.1タイトル、4歳が3.7タイトル、5歳が1.7タイトルとなり、学年が上がるにつれ減少していた。

② 学年をまたいだ繰り返し読み

同じ子ども達が、学年をまたがって同じ絵本を読み聞かせられたケースは、43 タイトルで46 ケースであった。内訳を表4に示した。このうち4、5歳児にまたがっていたのは9ケースで、それ以外は、3から4歳にかけてであった。

同じ子どもが3歳児から5歳児まで3年間それぞれの学年で同じ絵本の読み聞かせを経験したケースは2タイトルであり、『かもとりごんべえ』と『いよいよえ

ん』⁶⁾であった。

複数サンプルの子どもで学年またぎの繰り返し読みが見られたのは、『かもとりごんべえ』『おおきなおおきなおいも』『おおきなかぶ』であった。

どのような絵本が選ばれているか：カテゴリ毎の分析

学年毎・学期毎の読み聞かせ回数（表2）を分母とし、それぞれの時期での各カテゴリに該当する絵本の割合を求めた。以下、図2～9に、紙芝居、シリーズ絵本、年中行事関連、季節、園生活関連、昔話、繰り返し構造、言葉の感覚、に関連する絵本の読み聞かせが占める率（%）を示した。

紙芝居

入園当初の4月に、紙芝居を用いて「みんなで集まって、楽しいことが始まる」という期待感を子どもに持たせ、毎日の読み聞かせの場づくりを安定させたいという保育者の意図があり、それが3歳1学期の紙芝居の多さとして現れている（図2）。なお、3学期に選ばれている紙芝居は、正月やひな祭りなど行事に関する内容であり、これらの行事紹介の定番として例年紙芝居が用いられていた。

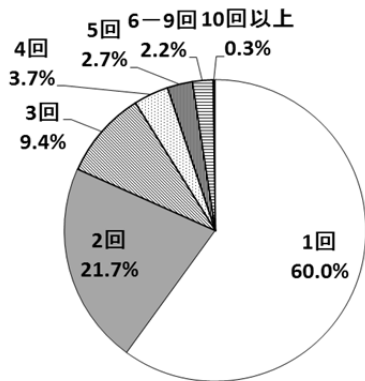


図1 絵本が読まれた回数の分布

表3 3年間で6回以上読まれた絵本のタイトル

絵本	回数	主な対象
14ひきのぴくにっく	6	4歳
あめふり(ばばあちゃん)	6	3歳
ぐりとぐらのかいすいよく	6	3歳
こぶとりじいさん	6	3歳
たまごにいちゃん	6	全学年
ばばあちゃんのおもちつき	6	全学年
ありこちゃんのおてつだい	7	3歳
3びきのこぶた	7	3・4歳
たなばた	7	全学年
てんとうむしのてんてんちゃん	7	3歳
3びきのくま	8	3歳
かもとりごんべえ	8	全学年
てぶくろ	8	3歳
どうぞのいす	8	3歳
おおきなかぶ	9	3歳
ももたろう	9	3歳

表4 同一対象への繰り返し読みのケース数

同じ年	2回読み	3回読み	学年またぎ	ケース数
3歳	31	1	3→4歳	37
4歳	11	1	4→5歳	9
5歳	5	0	3→4→5歳	2
合計	47	2	合計	48

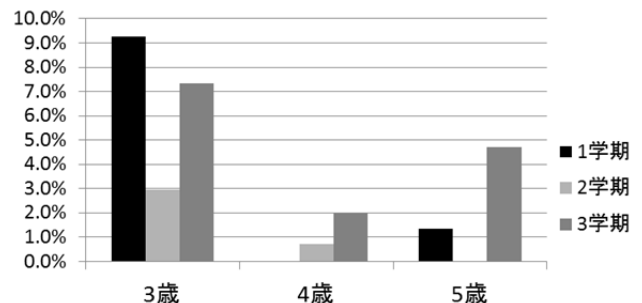


図2 紙芝居の率

⁶⁾ 絵本ではなく挿絵程度の児童書であり、一般的に3歳児向けの読み聞かせ絵本とはいえないが、描かれている内容と酷似した経験がクラスにあり、その話を読んだと考えられる。

シリーズ絵本

図3に示されるように、3歳1学期はシリーズ絵本の割合が高く4割を超えていた。“こぐまちゃん”シリーズなど入園前から家庭で触れていて馴染みのあるもの、“14ひきのねずみ”“10ひきのかえる”“ぐりとぐら”など季節毎に話が展開されているシリーズが読まれていた。また、“かわいいむしのえほん”シリーズは身近な虫を扱っており、外遊びで虫に気づき始める5月頃から読まれていた。繰り返しを楽しめる“ねずみくん”も3歳で多く読まれていた。

“14ひきのねずみ”は4歳でも、また、“ねこざかな”と“ばばあちゃん”は、どの学年でも読まれるシリーズであった。

5歳児特有のシリーズとして“わんぱくだん”“おれたち、ともだち”などの読み物があった。5歳児では他の学年と異なり、年度の後半にシリーズ絵本が増加していた。

年中行事に関連した絵本

絵本の中で取り上げられる行事は、もっとも多かったものが節分(1495回中の2.4%)、次に七夕とクリスマス(それぞれ1.3%)、もちつき(1.1%)となっており、ひな祭りや正月も含めて3学期(1~3月)に行われる行事が多かった。

図4に学年毎・学期毎の年中行事関連の絵本の率を示した。どの学年でも3学期は多かった。1,2学期の行事は、3歳児のみ絵本で紹介される様子が覗える。5歳児は、園の行事としてもおこなわれる節分の豆まきなどを最年長として取り仕切る役割があり、3学期の行事関連の絵本の比率が他の学年と比べても高かった。

季節の絵本

全体で、季節に関連する絵本の読み聞かせは、冬が10%。夏が4%、春と秋がそれぞれ約3%であった。図5には学年・学期毎の率を示した。冬が多いことに連動して、どの学年においても3学期に季節関連の本の割合が増えていた。

園生活に関連する事柄を含む絵本

3歳1学期は、幼稚園そのものを扱った絵本や園での生活、遊びに関連することが色々紹介されていた(図6)。おおむね、時期や学年が進むにつれてこの関連の絵本は減少していた。

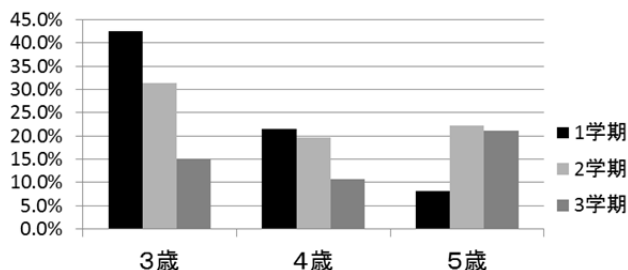


図3 シリーズ絵本の率

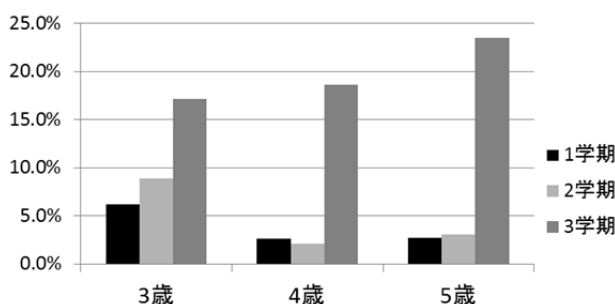


図4 年中行事に関連した絵本の率

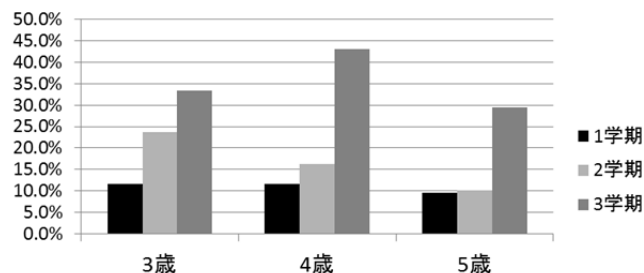


図5 季節関連の絵本の率

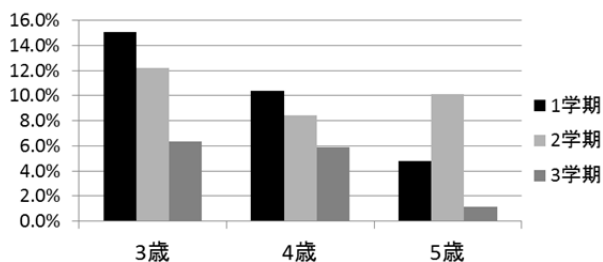


図6 園生活に関連する事柄が含まれる絵本の率

繰り返し構造の本

先の展開が予測でき、話が短くわかりやすい繰り返し構造のある絵本は、3歳の1, 2学期に多く読み聞かせされていた。学年が上がるにつれて減少し、5歳児ではほとんど示されなかった(図7)。

昔話絵本

図8に示されるように、3歳1学期はほとんど昔話の絵本や読み聞かせされていなかった。2学期以降、『3びきのくま』、『3びきのこぶた』、『あかずきん』、『おおかみと7ひきのこやぎ』など、馴染みがあるであろう世界の童話を読み聞かせ始めていた。1学期に多く読み聞かせされた短い繰り返し構造の話から、一歩進んで、ある程度の長さがあり登場人物も多くなる“物語”の世界を子ども達に提示するような選書になっていた。また、3学期は節分関連で、鬼が出る昔話が多かった。

4歳児では全般に昔話の占める率は少なく、学期での変化もあまりないが、5歳では年度の後半になって、昔話を取り入れられていた。

“言葉の感覚を育む”絵本

コーディング⑧のオノマトペ・リズムカルな言葉などが印象的に用いられている絵本が読み聞かせされている率は、3歳児で9%(特に2学期に12%)、4歳児と5歳児で4%であった。また、⑨の音韻意識を喚起するような言葉遊びやしりとりが出てくる絵本は、各学年とも1%であった。5歳児では、⑩のなぞなぞやことわざ、詩、落語などことばの知識やことばの文化に関わる絵本があわせて4%あった。⑧⑨⑩の合計を図9に示した。

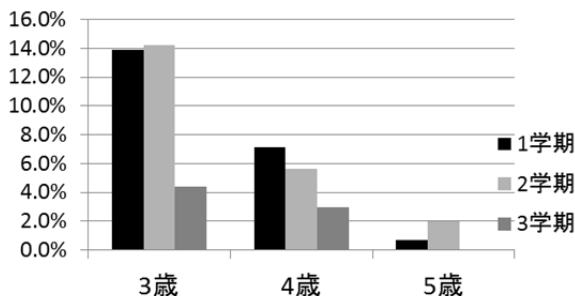


図7 繰り返し構造の絵本の率

考察

全体的な特徴

3年間全学年を通して1回しか読まれていない本が6割であった。保育の場で1冊の絵本が何回くらい読み聞かせされているのかについて、比較対象になりうるデータはない。しかし、本研究の6割の絵本が1回しか読まれていないという数値は、非常に高いと思われる。この年齢の子どもにはこの絵本を必ず読む、というような定番の絵本、学年で読み継がれている絵本が少ないのかもしれない。

繰り返し読みの実態についても同様のことがいえる。幼児は気に入った絵本を繰り返し読み聞かせるようせがむことは、多くの養育者が経験するといわれる。保育でも、同じ絵本を繰り返し読み聞かせることは一般的になされている(横山・宝川, 1999; 並木, 2012)。しかし、対象幼稚園では、保育者は同じ絵本の繰り返し読みをほとんど行っていなかった。もっとも多かった3歳児で、年平均で5冊が2回ずつ読まれていた程度であった。

多くの絵本を読み聞かせていることは、子どもの興味の広がりをも促す点で、利点はあるだろう。しかし、ある意味で、一冊一冊の絵本が消費されているような印象が与えられる。

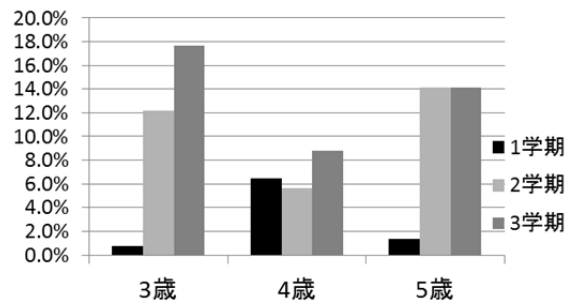


図8 昔話絵本の率

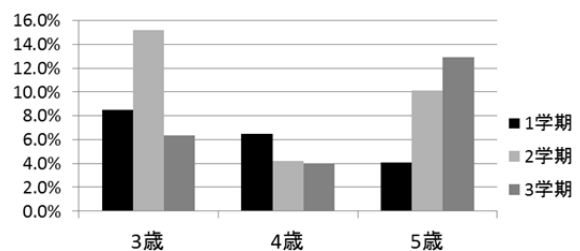


図9 言葉の感覚を育む絵本の率

この点に関しては、幼稚園の事情が背景にある可能性がある。本研究で対象となった幼稚園は、方法で述べたように保育経験の浅い小学校教諭経験者が担任をしており、しかも定期的に人事異動するという特徴がある。そのため、園として、学年として読み継がれる「定番」のようなものが自然に形作られることはないのかもしれない。また、年に2回の保育室配架図書(図書室からの貸し出し分)の入れ替わりも、“何度も読む1冊”の存在を成り立たせにくくしていると思われる。

また、選書自体が行事関連でなされる場合、あるいは、子どもの遊びのテーマに合わせてという場合、同テーマを扱っていれば、特定の絵本でなくてもよいことになる。「この絵本の世界を楽しみたい」という理由での選書であれば、他の本で代用は出来ないが、そのような理由でない限り、豊富な蔵書ゆえに、代用できる類似の本はいくらでもある、という状況なのかもしれない。

そのような状況であればこそ、週案作成時という短いスパンではなく、年間指導計画として、この時期にこの絵本をみんなで一緒に楽しむ、という読み聞かせの機会を事前に計画しておく必要があるのかもしれない。教育課程や年間指導計画に明記することで、保育者の入れ替わりがあっても、受け継がれるだろう。

学年・学期の特徴

学期による変化がもっとも明確であった3歳児、後半に特徴が示された5歳児、特徴が不明確な4歳児の順に、以下に述べていく。

3歳児

3歳1学期が多くの点で他の学年・学期と異なっていた。紙芝居、シリーズ絵本、園生活関連の内容が、他のどの時期よりも多く、繰り返し構造の絵本が3歳2学期と並んで多く、昔話はほとんど読まれていなかった。これらの傾向は、読み聞かせの場の定着を意識した選書を行っていること、そのため馴染みのシリーズ、短めの話など、誰もがその場を楽しめることを最重視した選書になっていることを表している。また、この時期、園生活のガイダンスを目的とした絵本の読み聞かせも多く行われていることが示唆された。

3歳2学期になると、言葉の感覚を育むようなオノマトペやリズムカルな言葉に彩られる本が他のどの時期よりも多く読まれていた。繰り返し構造も1学期に引き続き多いが、一方でシリーズ絵本や園生活関連は

1学期よりも減少し、昔話が読まれ始めていた。これらの傾向から、保育者の選書において、読み聞かせの場の定着とガイダンスの目的が1学期よりも薄れて、純粋に絵本の世界を「楽しむ」ことを意識する段階に入ったと考えられる。

3学期は、他の学年同様に季節関連・年中行事関連が多くなり、節分の関連で鬼が出てくる昔話も読まれるため、昔話の割合がさらに高くなっていた。同時に、繰り返し構造の本は少なくなり、それまでの時期とは異なる様相を示している。

5歳児

5歳児は、季節・行事以外の学期の変化として、1学期には少ないシリーズ絵本が、2・3学期に20%を超えること、同様に1学期にはほとんどない昔話が2・3学期に14%に達することが挙げられる。言葉の感覚を育む絵本のうち、言葉の知識や文化にかかわる内容が増加することも5歳児後半に特有である。以上の傾向から、5歳児の後半は、読み応えのある絵本を選んでいくといえる。

一方、1学期については、本研究のコーディングではいずれも低い値を示しており、ここからは、どういった観点で何を選んでいるかが見えてこなかった。週録等を振り返ると、遊びの広がりやねらいとして、遊びのテーマに関連した絵本を選んでいく可能性が推測される。

4歳児

4歳児も、5歳児1学期と同様に、本研究のコーディングによる分析結果では、他の学年と異なる学年特有のプロフィールを示さなかった。定期的な行事関連が入っていても、3歳ほど丁寧にガイダンスする必要もなく、また、ファンタジーなど長い物語を楽しめる5歳(内田, 1989)ほど、長い物語に挑戦できる段階にもない。このような発達の段階にある4歳児への絵本の選書の特徴は、本研究でのコーディング・システムでは捉えられなかったのかもしれない。あるいは、5歳児1学期同様に、遊びの広がりやねらいとして、遊びのテーマに関連した絵本選びが大半であった可能性もある。

3年間を見通して

最初に述べたように、対象幼稚園では、読み聞かせを教育課程や年間指導計画に位置づけておらず、保育者も年間の見通しを明確にもって絵本選びをしていたとは言い難い。にもかかわらず、3歳前半と5歳後半

においては、その時期なりの子どもの課題や、少し先の子どもの姿を考えた選書になっていたといえる。

入園当初の子どもに、降園前にみんなで絵本に向かう集まりの時間を楽しい時間として定着させることは、園への適応そのものを支える重要な働きを持つと考えられる。また、5歳の後半は小学校への接続期であり、読み応えのある絵本を読んだり、新たな言葉に触れたりすることは重要である。子どもの実態を見取り、次の育ちをイメージした選書を行っていたことが、結果として、3年間の育ちを見通した際に3歳前半と5歳後半に関して計画されるべき選書のあり方と合致したと考えられる。

しかし、本研究のコーディングの観点が限られていたこともあり、特に4歳に関しては明確な選書の特徴を明らかにすることが出来なかったため、4歳での読み聞かせ絵本選びの実際が、3年間の育ちを見通した際に適切なものであったかどうかは不明である。仮に、選書の意図として「その時の子どもの遊びのテーマ」に応じた絵本選びが大半であったとすると、絵本の内容に関するコーディングの観点を増やしたとしても、特徴は明確にならないかもしれない。この点は、絵本そのものの客観的な内容や構造のコーディングではなく、保育者の実際の選書理由をベースに分析しないと明らかにならないと思われる。たとえば、「読み聞かせの場作り」をねらった選書、「遊びの広がり」をねらった選書、「友達関係を考える」、「新しいことを知る」ことをねらった選書、「みんなでゲラゲラ笑う」ための選書などである。そのような観点からの分析を行うことで、本研究の分析では曖昧であった年齢や時期による保育者の選書の特徴が明らかになるだろう。

まとめと今後の課題

3年間分の週録の分析により、読み聞かせの選書の傾向が明らかになった。これに基づいて、①教育課程・年間指導計画の期毎に、この時期にこの絵本をみんなで一緒に楽しむ、という“こだわりの一冊”の読み聞かせを位置づける必要性が示唆された。そのような一冊は、保育者が事前に教材研究を行うことで、絵本に関連した遊びの展開を予想したり、実際の遊びの展開を援助するという実践につながるだろう。そのような実践の記録を園で共有することによって、園で、あるいは学年で読み継がれる定番の一冊が成立すると考えられる。

教育課程や年間指導計画に関連づけて、3年間の子どもの育ちを見通した絵本の読み聞かせをいかに展開するかについては、現に行われている降園前の日課としての読み聞かせについても検討しなければならない。分析結果に示された実践の姿には、そのまま指導計画として用いることが出来る要素があった。本研究の分析の限界から特徴が曖昧なままである4歳児クラスの選書について、今後検討を行い、その結果も加味して、プラン策定に当たる必要がある。

最後に、横山・水野（2008）の提案に触れておきたい。横山・水野（2008）は、新たなジャンルの絵本を子ども達と楽しむ実践、予想を超えた子どもの反応を、保育者自身も楽しむような読み聞かせの実践が、子どもの育ちを広げると述べている。そのような実践を試みるには、ある程度、保育者側にも冒険心が必要かもしれないが、“皆との一体感”と“興味の広がり”が、保育の場ならではの絵本の活用の意義であることを考えると、取り組むべき価値があると思われる。

文献

- 古市久子（2014）. こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本. 愛知東邦大学東邦学誌, 43(2), 87-104.
- 石井光恵・甲斐聖子（2014）. 保育で大活躍! 絵本から広がるあそび大集合. ナツメ社.
- 軽井沢町教育委員会・軽井沢町立図書館（2015）. 第二次軽井沢町子ども読書活動推進計画. (http://www.library-karuizawa.jp/pdf/karuizawa_dokusyosuisin.pdf 最終閲覧 2015年12月14日)
- 文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領.
- 文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領解説.
- 那覇市教育委員会（2013）. 第2次那覇市子どもの読書活動推進計画. (<http://www.city.naha.okinawa.jp/cms/kakuka/kyouikusyougaiakusyu/stuff/dokusyo%20full.pdf> 最終閲覧 2015年12月14日)
- 中村 稗子（1997）. 絵本はともだち. 福音館書店.
- 並木真理子（2012）. 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. 保育学研究, 50(2), 165-179.
- 大橋伸次・中平浩介・松本学（2005）. 「絵本」の選び方について. 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 26, 73-76.

- 高山智津子・徳永満理 (2008). 絵本でひろがる子どものえがお一発達にそった年齢別読み聞かせ. チャイルド社.
- 戸田市 (2009). 戸田市子どもの読書活動推進計画. (<https://library.toda.saitama.jp/pdf/kodomodokusyo/kodomodokusyo.pdf> 最終閲覧 2015年 12月 14日)
- 内田伸子 (1989). 幼児心理学への招待：子どもの世界作り サイエンス社
- 横山真貴子・水野千具沙 (2008). 保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義--5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から. 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要(17), 41-51.
- 横山真貴子・宝川雅子 (1999). 保育の中での同一絵本の繰り返し読み聞かせ：繰り返しの意義と繰り返し読まれる絵本の特徴の検討. 日本保育学会大会研究論文集(52), 860-861.

資料

- <繰り返し読みされた主な本>
- 『あめふり』(ばばあちゃんの絵本) さとうわきこ, 福音館
- 『うしろにいろのだあれ』ふくだとしお, 新風舎
- 『うみキリン』あきやまただし, 金の星社
- 『おおかみと7ひきのこやぎ』
- 『おおきくなるっていうことは』中川ひろたか, 童心社
- 『キャベツくん』長 新太 文研出版,
- 『きんぎょがにげた』五味太郎, 福音館
- 『ぐりとぐら』なかがわりえこ, 福音館
- 『さつまのおいも』中川ひろたか, 童心社
- 『そりあそび』さとうわきこ, 福音館
- 『たなばた』岩崎京子, フレーベル館
- 『たまごにいちちゃん』あきやまただし, すずき出版
- 『どうぞのいす』香山美子・柿本幸造, ひさかたチャイルド/チャイルド本社
- 『どろだんご』たなかよしゆき, 福音館
- 『とんとんとん』あきやまただし, 金の星社
- 『にん・にん・じんのにんじんじゃ』うえだしげこ, 大日本図書
- 『ねごさかな』『ねごさかなのすいか』わたなべゆういち, フレーベル館

- 『ねずみくんのたんじょうび』なかえよしを, ポプラ社
- 『はなをくくん』ルースクラウス, 福音館
- 『はなさかじいさん』
- 『うれしいのたまご』せなけいこ, 童心社
- 『14ひきのびくにつく』『14ひきのやまいも』いわむらかずお, 童心社
- 『3ひきのこぶた』
- 『999ひきのきょうだいのおひっこし』木村研, ひさかたチャイルド/チャイルド本社

<本文中で言及された絵本>

- 『ありこちゃんのおてつだい』(かわいいむしのえほん) 高家博成, 童心社
- 『いやいやえん』中川李枝子, 福音館
- 『エルマーのぼうけん』ルース・スタイルス・ガネット, 福音館
- 『おおきなおおきなおいも』赤羽末吉, 福音館
- 『ぐりとぐらのかいすいよく』なかがわりえこ・やまわきゆりこ, 福音館
- 『ぞうくんのさんぼ』なかのひろたか, 福音館書店
- 『てぶくろ』エウゲニー・M・ラチョフ, 福音館
- 『てんとうむしのてんてんちゃん』(かわいいむしのえほん) 高家博成, 童心社
- 『ばばあちゃんのおもちつき』さとうわきこ, 福音館
- 『へんしんトイレ』あきやまただし, 金の星社
- 『ロボット・カミィ』ふるたたるひ, 福音館

<本文中で言及されたシリーズ名>

- 「こぐまちゃんえほん」わかやまけん, こぐま社
- 「10ひきのかえる」間所ひさこ・仲川道子, PHP 研究所
- 「わんぱくだん」ゆきのゆみこ・上野与志・末崎茂樹, ひさかたチャイルド/チャイルド本社
- 「おれたち, ともだち」内田麟太郎・降矢なな, 偕成社